

作文集 1、2年生編

人生の感動 1年 犬塚桃萌

学校に行けなくなった時、ぼんやりとした頭の中で、「私の人生終わったな」と思った。私が不登校になった理由は、部活や勉強でのストレスだった。別にいじめられたわけじゃない、けがも病気もしていない。学校に行かなくても生きていける道があったとして、こんなに心が弱い人間が上手くやっっていける筈がないと、そう思って絶望した。

丁度その頃、弟も学校で苦勞していた。弟は、自分は苦しくても学校に行っているのに姉の私だけ家で寝ているのが許せなかったらしい。言葉や態度がキツくなっていった。私はその時、家族だからといって全員が味方してくれる訳ではない事を体感した。親の愛だって永遠じゃない、心の中では何を思っているのか分かったものじゃない。けれど、そう思っても、私は学校に行こうとは思わなかった。弟に言い返していても、私はもう、全部あきらめていた。

その後、コスモスクールという名前のフリースクールに通う事になった。友達と言って良いのかは分からないけれど、一緒にボードゲームをやったり出来る子は居た。何だかうれしかった。その中で、高校選びをはじめ、島田実業に決めた。

中学の卒業式は、私だけ個別で、小さな教室で行った。その中で、親に感謝の言葉と共に証書と花を贈る事になり、私は一緒に来てくれた母の前に立った。急に言われた事だったので、私は少しあせりながらも、必死に過去を思い出した。記憶の中の自分は、泣きながらも必死で前に進もうとしていた。そして、家族がその背中を押している。私の目から、自然と涙がこぼれた。

本当は、あきらめてなんかいなかった。まだ、道を歩いていたかったし、両親が心から自分を心配してくれている事も知っていた。その事に、やっと気が付いた。私が、やっとの思いで母に「ありがとう」と言うと、泣き笑いみたいな表情で「いいよ」と言われた。「どういたしまして」ではなく、「いいよ」と言われた事で、私は更に泣いた。その言葉に、ありったけの愛がつまっていた。

私が島実を選んだ理由は、多分、生徒の全員が楽しそうにしていたからだと思う。まだあきらめたくなかったから、もう一度がんばらせてくれそうな学校を無意識に選んでいた。今になって考えると、私が不登校になってからの行動全部が、そんな想いとつながっていたように思う。

合格の事を弟に知らせると、「オメデト」と言ってくれた。少しつっけんどんだったが、私の気持ちは明るかったので「これがツンデレというヤツだろう」とプラスの方向にとらえる事が出来た。実際そうだったと思う。

今の私が明るい理由は、過去の闇の部分を光のエネルギーに変換できたからだと思う。入学式の時に自分が自分に書いたメッセージも読んだが、そこには『ありがとう、これからもよろしく』と書いてあった。おそらくこれは、過去の全てが今を支えているというような意味なのだと思う。悪い思い出も、良い思い出も、いずれは全て感動に変わる。だから、これからもよろしくと、終わったと思っていた自分に言われた。

島実に来るまでの記憶、そしてこれからの時間を、私は絶対に忘れない。

私の人生に感動をくれた家族と島実には、感謝してもきれない。

ありがとう、これからもよろしく。そして、愛しています。

希望の光になれますように。 1年 竹原果秀

流してきた涙、愛想笑い、震えた手や体。忘れられない、忘れちゃいけない努力の証。沢山の人が昔から苦手だった私は、学年が上がるにつれてどんどん小学校から離れていった。習い事は続けていたけれど、教育支援に頼って学校には行かなくなった。

特にこれと言った理由はない。友達も居て、遊ぶのも好きで。分からないけれど、私は自らの手で時間を止めていた。学習せず、ただ気分教育支援へと行き、運動の時間だけを過ごして。勉強も、精神年齢も、私は4年生で止まったまま時間だけが過ぎていった。

中学に入って、コロナが始まって。入学式で見た沢山のひととマスクは、多分忘れられないと、今でも思う。入学式翌日からは、小学校と同じく家に居る生活。担任の先生には会いに行ったけど、授業を受ける私の姿なんて、何をしても想像できなかった。

何もしないまま、ただ時間が過ぎていく。中学2年生になっても、何も変わらなかった。けれど、私にひとつの出会いがあった。進路の関係で、姉の通っていた島実へ学校説明会に行く事になった。ぼんやりと参加していた説明会で、私の目が何か変わったとお母さんが後から言った。そのまま、進路を島実だけに絞った私にはきっと、なにかしっくりくるものがあったのだろう。自遊祭にも行って、卒業生だった姉にも沢山話を聞いた。だって、島実という学校で、学び、笑い、奮闘する私が、温かな光の中で立っている私が、想像できてしまったから。慣れない勉強も、椅子に座り続ける事も、考えれば考えるほど出てくる不安は、「学校に行く事」と真剣に向き合っている証拠だと思えた。そう思えたら、余計頑張れた。少し、自分に自信が持てた。

この学校には、この学校の色があって、愛があって、沢山の出会いが転がっている。友達と授業の話をして、笑い合う。朝は中学の時より早く起きるようになった。今まで親に甘えていた事が、自分で出来るように努力をするようになった。入学してから少しの時間でも、こんなに意識が変わるとは思っていなかった。去年の私に今の私を見せてあげたいと心の底から思う。「凄いでしょう、あなたがこんなにも胸を張って歩いているんだよ。」と。

4年生で止まっていた時間が、ようやく私の中で動き始めた。胸を張って、学校が楽しいと言えた。私の足りないものが、少しずつ拾われている感覚。島実に会えて、本当に良かったです。今はまだ右も左も分からないような1年生だけど、いつかこの学校へ出会う、時の止まってしまった子達や親御さんに、いつの日か私が見たような温かい光を見せられるよう、今の私の出来るところから成長していきたいと、強く思います。こんな私でも、誰かの希望の光になれますように。

あの時見た景色を忘れたくない、 1年 田島由彩

「あの時見た景色を忘れたくない」。そう思えるのはきっと今まで生きてきた人生で、そして自分の中で何かが強く変わった瞬間だったからだ。

朝起きてご飯を食べる、日中は学校へ行き、ヘトヘトになって帰ってくる。そんな当たり前の日常が2年前の私にはできなかった。何かが私にそうさせたのか、原因は私自身にも分からない。「当たり前にできることが私にはできない」それがただ悔しかった。普通のことができない自分にもイライラしていたし、何より、そんな自分がとても恥ずかしかった。

島田実業高等専修学校に入学して1ヶ月あまり、この学校に通い始めて分かったことがある。この言葉に出会うことができ良かったと、それは「多様性」という言葉だ。この学校には色々な人がいる、それぞれの色を持っている。だから、みんな違う。服装も違えば外見や内見は全く違う。それはある意味「自分らしくいられる」ということだ。この学校が今までとは違う。そう思えるのは入学式の思い出があるからだ。「先生たちのキラキラとしたまぶしい笑顔」、「新入生を見つめる優しい眼差し。」「ここにきたからには大丈夫と言ってくれたあの時の言葉を」

「だから私は忘れたくない。この、大切な思い出を。この景色を。あの時の「入学式」を。

わすれたくない思い 2年 松井都煌

ぼくが島実に入り1年が経ち、今は2年生です。島実に入って1年が経ってわすれたくないことがあります。

それは、先生達のやさしさとあたたかさです。先生達はぼく達によりそってせっしてくれたり、話してくれてとくに思い出があるのは、理事長や学校長が言ってくれた「よく生きてここにきてくれたね。」という言葉です。その言葉を言ってくれた時はうれしくて泣いてしまいました。あなた達は私の光です、そういったあたたかい言葉もかけてくれました。

ぼくはこの学校ならがんばれると心のそこから思いました。小学校、中学校で色んなことができなかった分島実でとりもどそうと思い1年すごしてきて今では、たくさんの友達ができ、毎日楽しく学校生活をおくれています。ぼくも最初のころは、コミュニケーションがうまくとれなくて友達もいなかったけどみんなやさしくて話したらすぐに友達ができました。ぼくがこんなにも変わったのは、この島実のおかげです。先生方やせんぱい方のやさしさあたたかさにととてもすくれました。そのやさしさあたたかさをわすれずに学校生活をより良くしていきたいです。ぼくは島実に入りこうかいはしていません。ぼくは島実がとてもとても大好きです。

私が忘れたくない事 2年 N. M

私がわすれたくないと思うことは、島実での流れて行く時間(とき)です。1年生の時の入学式、それはそれは、楽しい時間でした。先生達はヒマワリやら魚のタイのかぶり物をかぶって私達を優しい笑顔と場所でむかえてくれた。私はそれまで「私は本当にここでうまくやっていけるのだろうか。」と思い、不安でいっぱいだった胸の奥の黒いかたまりがくだけていく感じがした。

「心の居場所」を見つけることが出来たと私は、思いました。

もう一つ本当に忘れたくないと思っている事は、理事長の角田先生がおっしゃっていて、講堂の壁にもかざられている「あなたはあなたであればいい」その言葉にも、どれだけ心が救われたことか。今まで、自分を偽っていました。「一人になりたくないから、きらわれないように」とずっと自分を偽って、ですが、最後は自分が苦しくなって上手く人と接することも出来なくなっていました。ですが、「あなたはあなたであればいい」というステキな言葉に出会えた時の心の気持ちを忘れたくないです。